

## 往復書簡エッセイ 「結婚」は本当に必要な制度なのか？

著者	岩本 一善，倉橋 耕平
雑誌名	神戸山手短期大学紀要
号	52
ページ	177-189
発行年	2009-12-20
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1084/00000838/">http://id.nii.ac.jp/1084/00000838/</a>

## 【往復書簡エッセイ】

### 「結婚」は本当に必要な制度なのか？

#### A Correspondence Essay on the Meaning of Marriage

岩 本 一 善  
倉 橋 耕 平

キーワード：結婚、制度、慣習、社会意識

#### 要 約

本稿は、執筆者2名の往復書簡という体裁をとっている。初めに倉橋から、「一般的に『結婚の障壁』と認識されている条件がすべてクリアされれば、果たして人は積極的に結婚という選択に踏み切るのか。否、結婚をめぐる言説が取りざたされるとき、実はそこで取り扱われているのは結婚それ自体ではなく、結婚を取り巻く周辺の問題である。結果として、それによって却って結婚それ自体は常に不可視化されてきたといえるのではないか」という問いかけがなされた。それに対して岩本は、「『すべての有機体は環境に適応し種の保存を図ること』を至上命題としている。理屈でいくら考えてみたところで、人がこれまで継続してきた営為は止められない」とする。倉橋はこれに応じて、「そうであるとしても制度としての結婚は無用である。そのような制度があるがために、そこからこぼれ落ちる者がピックアップされることになる。また、制度を構造的に支えているのは社会意識であるから、この社会が子供を社会的存在、すなわち『世界公民』として捉える視点を採れるものとなるよう改革していくべきである」とする。岩本は「思弁的に可能であるにもかかわらず実現されていないものは、現に慣習的に実践されていることより正しいとは限らない。また現代社会は、制度としての結婚を強制する社会とも思えない」とする。最後に結婚という制度に対して両者は、「制度の改革は、その結果を享受すべき社会の意識がそれに伴って変化しない限り、改革者の意図した通りの結果は得られない」という点で同意した。

#### はじめに

平成19年度の文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代 GP）」のテーマ「地域活性化への貢献（地元型）」に本学キャリア・コミュニケーション学科の【地域・大学インタラクション型の学習事業－理論・実践一体型教育プログラム 「ACT 山手」の構築】が採択され、今年度がその最終年に当たる。このプログラムの切り口は「魅力調査」（マリンポートツーリズム）と「魅力創出」（アトラクティブプライダル）である。本エッセイは、後者について2名のティーチング・スタッフの考えを反映したものである。

現代の日本社会における「結婚」には、晩婚化、非婚化、未婚化などの傾向が指摘されてい

【往復書簡エッセイ】「結婚」は本当に必要な制度なのか？

る。センサス・データを見ても、年々の婚姻件数の減少と晩婚化傾向は明らかである。言うまでもなく、センサス・データは当該社会の様相と無関係では有り得ない。1960年代後半より、いわゆる「お見合い結婚」よりも「恋愛結婚」が増え始めた。しかし恋愛結婚が多くなったとはいえ、当時とて職場での見合いの斡旋や紹介といったものは残っていた。他方、現在に至っては、そのような慣習はもはや多くの職場では一般的なものではなくなっている。男女交際（恋愛）の幅は広がり、恋愛と結婚とがそれぞれ分離した価値観で捉えられることも非常に多い。

そうした恋愛と結婚に関する事情の変遷とは別に、「結婚適齢期」とされる若者を取り巻く社会の経済的状況の変化もまた、彼（女）らに結婚を思いとどまらせる要因となっているようである。2008年暮れの世界同時恐慌や、1990年初頭のバブル経済崩壊を挙げるまでもなく、不況は結婚への大きな障碍となっている。また、そのような恐慌を招いた要因として、いわゆる日本式終身雇用制度の崩壊、実力・成果主義の一般化、労働市場の規制緩和による雇用形態の変化（非正規社員の採用）など多くの制度的変化と、そのグローバル資本主義の隆盛との関係を指摘することもできるであろう。

そのような社会的状況を背景に、2009年の9月、民主党が第一党になり、政権交代を果たした。連立政権を組む社民党は、国会に夫婦別姓法案を提出することを明言している（それが実現するかどうかは現段階ではわからないが）。それを、結婚制度が変化していく兆しと捉えることは早計なのかもしれない。しかし、そうした議論が俎上に上がること自体が、結婚に関する現代社会のイメージが変化していく契機になるということは考えられる。

前置きが長くなったが、本エッセイは岩本と倉橋の往復書簡形式をとっている。書簡は、倉橋→岩本の順で、互いに要所で「打っ遣り」を挟みつつ2往復させたものである。こうした書簡形式のやり取りが、果たして「結婚」というものの本質へと迫ることができているのか否かは読者の判断に委ねるところであるが、少なくとも本稿が読者の思索を何らかの形で刺激するものになれば幸いである。

## 敬愛なる岩本先生へ

ご結婚とご子女の誕生を機に、「ファミリーしている」岩本先生とこのような往復書簡をし、一緒にお仕事できることを非常に光栄に思っています。また、岩本先生に現代GPのお仕事をご紹介頂けたことを大変感謝しています。ともあれ、いろいろ苦労もあったし、嬉しい思いも悔しい思いもたくさんしたし、先生の「顔に泥を塗る」ことばかりで、失礼の連続（連発？）の2年半でした。そのことについて、この場を借りてお詫び申し上げます。でも、最後にこのような文章を書かせていただけるとことを至福に思いますが、紙幅の都合もありますので、挨拶はこれくらいにしましょう。

さて、与えられたテーマは「結婚」です。結婚する直前まで「結婚などしたくない」と言っておられた岩本先生は、これについてどう応答するのか楽しみです。先に、私の立場を言っておきます。私の立場は、「結婚？そんな必要ねーじゃん」です。

私の「問い・疑問」は非常に単純ではあるけれども、非常に根本的なものです。私は、理論屋（失敬、岩本先生もそうでしたね）ですので、こんな風に問い・疑問を立てます。こうです→「もし、現在（現代）において、人々（特に若者）にとって『結婚への障壁』となっているものが、すべて解消されたとしたら、それでも人々は結婚するのでしょうか？」。

結婚に関する本、論文、記事、言説（意見）は、大量生産されていますが、こうした「超」根本的な問題は、見逃されています。一例をあげるだけでわかると思いますが、昨今の「婚活（結婚活動の略）」ブームとその言説は、最もそれを目に見える形にしています。ブームの火付け役である白河桃子は、「結婚は嗜好品になった」と言います（山田昌弘／白河桃子『「婚活」時代』ディスカヴァー・トゥエンティワン、2008）。本当にそうでしょうか。現在の結婚は「嗜好品」と言えるほど自由な選択なののでしょうか。それらの言説は、「嗜好品」と言いつつ、「結婚することは、大切な何かである」として語られているような気がしてなりません。

現在、若者にとって、「結婚への障壁」となっているポイントはいくつか考えられます。ひとまず①金（結婚資金、生活資金）、②子供（産む身体、養育）、③規範（家の存続や異性愛）、④恋愛ってところでしょうか。これらは、よく議論されることだし、メディアでもよく見られる言説です。これについて、いくつか考えてみようと思うのです。とりわけ、今日この手紙では、①と②についてあれこれ言ってみようと思います。

結論から先に言いましょう。①と②については、いくらでも解消することが可能であるため、（理論上）実際のところ「結婚への障壁」とはなりえません。というのも、これらをめぐる言説は、条件A B C...が整えば、Dをしてよいという「条件付き容認論」と考えるからです。つまり、異性愛で、金があって、子供が産める身体状況で、家の繁栄につながるような人が相手であれば（条件A B C...）、結婚してよい（D）と言っている、というものです。

ですが、肝心の「結婚」（D）は、条件A B C...に埋もれて、なんだか見えなくなっています。でも、この条件A B C...はいくらでも解消可能ではないのでしょうか。

①金（結婚資金、生活資金）については、こんなことが言えます。おそらく、すべての人がどんな形であれ食うに困らない金があることを望んでいると思います。ということは、理論上、話は簡単です。金があるようにすればいいんです。

反論があることでしょう。たとえば、「妻を養わなければならない」と反論する男性がいたとします。でも、それはおかしい話です。女性が働けない社会もおかしいし、「男性が女性を養わなければならない」という義務はありません。ですので、①金の問題がすぐさま③規範の問題にスライドされて、別問題になってしまいます。

【往復書簡エッセイ】「結婚」は本当に必要な制度なのか？

他にも、こんな反論もあるでしょう。「現在、職がなくて、安定的な収入がない」という反論です。こう言ってもなお、①金（結婚資金、生活資金）からは、少し遠い問題です。つまり、結婚を中心とした問題からは離れて、その反論は「労働問題」です。そうならば、結婚云々ではなく、労働問題を解消するべきです。結婚よりも「ベーシック・インカム」の話をすべきでしょう。

こんな反論も予想されます。「現実問題として、金があるようにするなんて無理だ」というものです。それは、諦めですし、反論としては卑怯です。食うに困らない金がなくて苦しんでいるのならば、それは社会的（＝福祉の）問題です。でも、当然これも「結婚」とは関係ありません。金がなくても結婚は紙切れ一枚でできるからです。

このように考えてくると、まず、結婚と金は関係ありません。そう思うと、金が意識されるのは、世の中で考えられている「結婚」言説が「良い結婚」を指しているからだ、とわかります。結婚自体は役所に行けばいくらでもできるのですから。

2つ目の問題に移りましょう。②は、子供（産む身体、養育）でした。確かに、60歳で出産というのは物理的になかなか無理な話です。また、若い身体の方が出産には向いています（個人差はありますし、相対的に出産に適した状態にあるという意味です）。それは、多くの人が知っている情報です。

ですが、2点おかしいことがあります。

1つ目は（順番は関係ないのですが）、産んだ親が子供を育てる義務はない、ということです。確かに、産んだ親が子供を育てる方が「合理的（道理や論理に適っている）」と考えられます。ですが、そうとばかりは限りません。よくニュースで見かけるように幼児・児童虐待はありますし「ネグレクト（育児放棄・ケアの放棄）」もあります。つまり、ある人が産める身体ではあるけれども養育に向いているかどうかは、未知です。

ですが、どちらにせよ暴力は許されません。ケアがなければ生きられない人を放棄することは殺人や傷害です。むしろ、赤ちゃんポストや、里親に出すなどした方がいいでしょう。産んだけれども、育てないという意図（あるいは「権利」）を社会が補うことは可能です。そのような制度を作ればいいだけの話です。結婚とは関係ありません。また、産みたくても産めないという問題も結婚とは関係ありません。単純に、身体の問題に回収されます。

2つ目は、子供を産む義務があるかどうか。そんなものはありません。なぜ子供を産まなければならないのか。国家や共同体の未来のためでしょうか。それならば、なぜ国家や共同体を存続させなければならないのでしょうか。子供を何らかの手段として用いるのは、フェアではありません。別に国家や共同体が減びようが、人類が減びようが「大きな問題」ではありません。国家や共同体が減びても、また誰かがやってきてこの土地を統治することでしょう。人類が減びても、苦しむ動物はいません。

また、なぜ結婚しなければ子供を産んではいけないのでしょうか。別に結婚しなくても、身

体的条件（生殖的条件）さえそろっていれば、子供は産めます。なぜ結婚が必要なのでしょう。この点は、「良い結婚」「良い親」「良い子孫」「良い人類」ということが前提にされているように思われます。では、なぜ「良く・善く」なければならないのですか。

ともあれ、この2点から言いたいことは、簡単です。指摘したいのは、なぜか結婚を問うことは、自動的にまったく別のことを問うようになってしまっていることです。言い方を変えれば、「結婚」という言葉がマジックワードになっていて、その周辺にある問題を常に既に不可視化しているように思うのです（そしてそれは、常に暴力の温床になってきました）。と同時に、結婚の周辺の問題が結婚の話題として取り上げられる時は、常に「結婚」それ自体が不可視化されるという議論の構造が浮かびあがります。

「問い」にも書いたのですが、そうした周辺問題が解消されれば、人々は結婚するのでしょうか。僕は、結婚する必要がなくなるのではないかと考えている次第です。

岩本先生は、どのようにお考えですか？

2009年9月2日 東大阪の自宅にて

倉橋 耕平

倉橋 耕平 殿

うむ？、人んちの娘を「ご子女」という言い方をするものなのか？ それはそうと、私は「ファミリー・マン」というより *henpecked man* であるな。それと、貴君を現代 GP のスタッフとして推薦したのは縁というやつであって、その後に貴君が本学で高い評価を得ているのは専ら貴君に帰せられることであるからして、気にしないように。

それでは本題に。まず言うておくが、私は理論屋ではない、むしろプラグマティスト (*pragmatist*) と言っていいくらいだ。違うか？ まあよい。いずれにせよ、そのような私から、自らを「理論屋」と称する貴君に物申したい。なぜ生物が自然にやっていることを、理屈で考えて納得してからでなければ行動には移していけないのか。いいではないか、そういうふうになっているのだから。いい若いもんがブラブラしていてもろくなことはないから早いとこ所帯をもちなさい。

マッカーダムズ (*McAdams, D. P.*) という人も、「すべての有機体は、基本的に2つの生命形態の様式をもっている。1つは自己拡充 (*agency*) の様式であり、もう1つは同化 (*communion*) の様式である」としているのである。平たく言えば、生き物はみな別の誰かと交わることで自分を増殖していくのだ、ということだろうか。人間もまた然り、理屈じゃない、金があろうがなかろうが（貴君の言う条件①）、配偶者に対して愛情を抱いていようがいまいが



【往復書簡エッセイ】「結婚」は本当に必要な制度なのか？

(同じく条件④)、多くの場合は同種の異性とカップリングし、2人の間に子どもが生まれた時はその子を育てていくのである。以上。なにか文句でも？

わからない人だな。では順を追って説明しよう。

まず私自身がかつて結婚に懐疑的だった、もっと有り体に言えば、結婚なんて恐ろしくてとてもじゃないがする気になれなかったのは、専ら私という個人に関してのみ、なのである。だから、貴君のように「結婚なんて必要ない」などと思ったことはない。結婚したい人、きちんと結婚できる人は結婚すればよいのである。

ではなぜ私は結婚が恐ろしかったのか。マイナーな理由は、ただ単純に、他人と生活を共にするなんてことが、とてもじゃないが私には想像できなかったからである。「個性と自由とを自分の私的な時間内で可能な限り恣意的に享受する」というのが、かつての私の最大の煩悩であったからね。しかし、達成不可能な境地を夢想するからこそ煩悩というのかなと思い始めたときから、こちらについてはある程度は呑めるようになってきた（それに、結婚することで自分の個性と自由とが死んでしまうと思っているような人というのは、どっちみち大したことはない、どちらかというと下らない人間なのだと思うよ）。

それはさておき、より切実な理由である、「結婚して私の子どもができれば、『私』という系を受け継ぐ存在がこの世にもう一人できる」ということ、このことの恐ろしさについては未だに克服できずにいる。貴君はもう知っているだろうが、私はこう見えて実は、自分がこの世の中に生きていることに積極的な理由を見出せていない人間だし、自分のやることなすことに確とした自信をまったくもてずにいる人間である。さらに言えば私は、自分の中に確かに存在している度し難く下品な部分、そういうものに我ながら我慢がならない人間なのである。自己嫌悪というのはナルシズムの裏返しということも理屈ではわかっているのだが、本当にこの世に初めからいなかったことにして消えてなくなってしまうと思うくらい、自分が嫌になることがしょっちゅうあるのだね。自分の子どもをつくるということは、そういう人間の少なくとも1/2を受け継ぐ人間がこの世に生まれてくるということである。そのことに対する嫌悪とも不安ともつかぬ漠とした恐怖、それこそが私が結婚したくなかった最大の理由なのである。「俺ってかっこいい」などという、実に軽薄な科白が口癖である貴君にはわからないことであろうが（いや、ナルシズムは自己嫌悪の裏面であるからして、貴君も本当はよくわかるんじゃないか、こういう気持ちか）。

にもかかわらず、なぜ私は結婚し、さらには子どもまでもうけたのか。それを強く望んだ配偶者に押し切られたからでしょうって？ 酒席での与太話を真に受けてはいけないよ。まあそういう面がない訳でもないが、実際にはこう考えたからだ。私は、「私の系」という言い方でまるで自分という存在が自分一個で完結したものと考えているようだが、本当にそうなんだろうか、と。貝原益軒という人は『養生訓』のなかでこう言っている。「人の身は父母を本とし、

天地を初とす。天地父母のめぐみをうけて生まれ、又養はれたるわが身なれば、わが私のものにあらず」 貴君のようなりベラリストはこういうものの言い方に反射的に異を唱えたいなることであろうが、よく考えてみてほしい。人間の命、そして身体、そういったものを当人だけの所有物と考える方がむしろ不都合なことが多いのではないだろうか。

私は動物学者ではないので、人間以外の生き物について詳しいわけではない。それにしても人間のベビィは奇妙だと感じる。母体に比べてかなり重い体で生まれてくるのに、自立できるまで成長するのにかなりの手間と日数を要する。重い体で生まれてくるのなら産後間もなく自立してもよさそうなのに、そうはならない。自立できるまで成長するのに長い日数を要するのなら、出生時の母体の負担を和らげるために、もう少し小さな体で生まれてきてもよさそうなのに、そうはならない。人間のベビィは難産で生まれてきて、物理的に自立して生きられるようになるまで成長するまでに、その周囲の人びとに多大な労力と時間を強いるものなのだね。

加えて、人が己自身の資質であると自惚れたり、あるいは恥入っていたりするもの、そういうものの殆どが実は血統から受け継いだものであるということはないだろうか。いや、たとえそれらが後天的な経験によって身に付けられたものであったとしても、そのような環境、条件を調えたのは、当人自身の力のみによることなど少ないのではないだろうか。何より、その人間を形作っているコトバ、それによって感じ、考え、表わすコトバというものの、もはや自分とは切っても切り離せないものであるはずのものが、元を糾せば自分などとはまったく無関係にそこにたまたま在ったものなのだとということ。つまり、一個の人間などというのは、気も遠くなるような長く複雑な連年のうちの、ごく小さなひとつのピースに過ぎないのではないか。

そのように考えたから私は結婚し、ベビィをもうけ、育てている。私と配偶者との系に新しい流れをつなぎ、そこにまた新たな流れがつながるのを見届けるために。おお、さすがは21世紀の吟遊詩人、山手の *talking blues mumbler* と称されるイワモトさんだけのことはある、実に気障だ。実に気障ではあるが、正論でもある。ブラボー！

ついでに言うておくが、私は、結婚はしたい人だけがすればよいと考えている。してしまった人がやめなくなったら離婚すればよい。同様に、女性は子どもを生むことが義務であるなどと思ったこともない。生むも生まないも好きにしたらよい。いずれも、いくら当人がそれを望んだところで必ず思うようになるものではない、というところが肝ではあるが。しかし、いったん生んだのであれば、自身（ら）が育てられない場合であっても、他の誰かにその子をきちんと育ててもらえるよう見届ける義務はあると思うがな。

いずれにせよだ、今のところ自分がターミナルになっている系を別の系と接合させて、そこに新しい系をつくっていく。そういう一連のことを便宜上この社会では結婚とか家族とか呼んでいるだけなのである。理屈で考えたって無駄。頭のいい（と自惚れている）人間にとって、そこにどんな社会的な意味が読み取れようが、人がそのように行為してしまっているものを



【往復書簡エッセイ】「結婚」は本当に必要な制度なのか？

「間違っているから止めなさい」などということはできないのである。フーコーだかなんだかの言う「訓育 (discipline)」というやつ、「世間一般の人間ときたら、それが後天的に身に付けられたものであるということや、間違ったものであるということすらも気づかぬまま、そのような行動や態度を自明のものとして育て上げられてしまっている。だから、頭のいい我々がそれを正してやる必要がある」というのは大きなお世話なんである。リベラリストのなかには無知蒙昧な大衆を啓蒙したいというお節介な人が時々いるが、後天的なものだろうがなんだろうが、それがコトバと同様にもはや自身の血肉と分かち難く結びついてしまっている場合、それは本人にとっては第二の天性なのではないか。「習い性となる」というやつか。

それから、コミュニケーション研究を専門にする者として（あつ、知らなかった？）これだけは言っておきたい。「社会や共同体なぞ存続させる必要は些かもない」などと嘯くのは、コトバという厄介なものを獲得し、そのことで自意識を身につけてしまった人間ならではの尊大な思い上がりである。自意識を持たない有機体にとって、「環境に適応し種の保存を図ること」、これは本能に刷り込まれた至上命題なのである。愚かな人間どものみが、シニカルにこの世を拗ねてみせることができる。人類が減びても苦しむ動物はいないとな？ 愚か者め、人類が苦しむではないか。それとも貴君は、われわれ人類は動物ではない、あるいは選ばれし特別な種であると考えてるのか。人類が減びることが大きな問題ではないなどという痴れ言をほざいて許されるのは思春期までと心得よ。

以上が、貴君の問いかけに対して私が考えたことである。直接には貴君の問いかけへの答えにはなっていないように感じるかもしれない。いずれにせよ、私の方もこのようなことについて改めて考える機会を設けてくれた貴君に対して謝意を表したい。Thanks a bunch!

2009年9月12日 大阪市都島区の借家にて

岩 本 一 善

親愛なる “talking blues mumbler” 岩本先生へ

ペイペー!!

“Thanks a bunch!” …… 僕、ぶどうかバナナっすか？

返信が遅くなって申し訳ないです。お手紙、拝読。ただし、1点修正。「俺ってカッコいい」ではなく、「俺、カッコいい」です。お間違えなきようお願いします。しかしながら、その後続く《いや、ナルシズムは自己嫌悪の裏面であるからして、貴君も本当はよくわかるんじゃないか、こういう気持ちか》には、同意なんですけど…（そこが辛いねえ）。

ともあれ、マッカーダムズ、貝原益軒……引用？ なので、僕も引用します。僕の修士課程の師匠である大越愛子は、近代社会において「恋愛・性愛・結婚」が「三位一体」になったこ

とを指摘します（『恋愛三位一体幻想』、大越愛子／堀田美保編『現代文化スタディーズ』、晃洋書房、2001）。さすが。確かに、その通りだと思います。つまり、そもそも「付き合いたい人」「セックスしたい人」「結婚したい人」はすべて別です。それをひとまとめにしたのが「ロマンチック・ラブ・イデオロギー」です。ですが、最近の傾向については、谷本奈穂が、このイデオロギーをひっくり返して、恋愛の結婚化ではなく、「結婚の恋愛化」を指摘します（『恋愛の社会学』、青弓社、2008）。つまり、いわゆる「ゴールイン」をしてもなお、恋愛関係を維持する形を求められる言説が数多くある傾向を指摘しているわけです。僕としては、面倒くさい時代です。だって、それだったら、結婚しなくてもずっと恋愛でいいじゃない!? お互いの「愛」を規定するために、法による結婚制度なんて必要ないじゃない!?（前の手紙の条件④）

岩本先生の言う「結婚はしたい人だけがすればよい」という考えには、賛成です。しかし、本当に「結婚はしたい人がすればよい」状況にあるのでしょうか。在日朝鮮人、トランスジェンダーなど、結婚という制度によって、結婚したくてもできなかったり、困難であったりする人々がいます（前の手紙の条件③）。ということは、つまり、現在の結婚制度は岩本先生がおっしゃるような「したい人だけが」という条件を満たしているわけではないので、やはり「したい人だけがすればよい」という前提を単純に許容できるわけではありません。そして、真逆のことも言えます。「結婚はしたい人だけがすればよい」という意見（その意見が成立可能な場合）は、自由な選択を尊重するわけですから、結婚しなくても十分にやっていける社会があつて、初めて成立します。

とはいえ、「リベラリスト」と冠された私としては、当然のことながら、制度改革よりも、（論理的な）意識改革が必要なことと思います。というのも、（劣悪な）制度を解消して、解決する問題ならば、社会運動や政治運動をすればよいと考えるからです。しかし、意識は、それよりも厄介です。つまり、制度を解消してもなお、みんなに違和感が残るのであれば、それを解消しなければなりません（その意味では、私は《無知蒙昧な大衆を啓蒙したいというお節介な人》なのではないでしょうか?）。こりゃ、ムズい。でも、それが理論屋の仕事であると思います。

岩本先生は、《人間の命、そして身体、そういったものを当人だけの所有物と考える方がむしろ不都合なことが多いのではないだろうか》《人が己自身の資質であると自惚れたり、あるいは恥入っていたりするもの、そういうものの殆どが実は血統から受け継いだものであるということはないだろうか。いや、たとえそれらが後天的な経験によって身に付けられたものであったとしても、そのような環境、条件を調えたのは、当人自身の力のみによることなど少ないのではないだろうか》という興味深い問いを立てます。

おっしゃるとおり、人間が一人では生きていけないことは多くの人が納得することでしょう。自己の生命にせよ、身体にせよ、当人が所有しているというよりも、当人が何らかの決定を下さざるを得ない生命／身体と表現する方が適切かと思います。私は、そのような当人の生命・身体に関する問題系を「自己決定－自己責任原則（お前が決定したのだから、その結果もすべ

【往復書簡エッセイ】「結婚」は本当に必要な制度なのか？

てお前の責任だ！という考え)」で捉える議論とは、距離をとります。

その際、意識するのは、「社会」です。正しく言えば「社会的なもの the social」です。この「社会的なもの」とは、主に（大きな意味において）「福祉」を意味します（市野川容孝『社会』、岩波書店、2006年）。それを前提と考えた場合に、血縁や環境をどのように捉えるかということは重要です。血縁や環境（＝生まれ）は、運命（≡コントロール不可能なもの）です。子は親も環境も選ぶことができません。親も生まれてくる子を選ぶことができません。それ自体は単なる事実です。しかし、その「運」をどのように理解するか、ということは大きな問題です。もし、運だというのであれば、それを徹底することができると私は思います。すなわち、生まれた子供を、（実際には産んだ者が育てるとしても）「世界公民」（カント）として捉える意識を持つことができると思うのです。

どういうことか。つまり、生まれてきた子供を誰が育ててもよい、という「社会的なもの」の視点を採る契機を提唱できると思うのです。子供を社会的な存在として扱う意識を人々が持つことによって、「結婚」も変わってくるでしょう（ちなみに、運を徹底していくと、最終的にはプラトンっぽい民主主義における「くじ引き」の話と繋がっていきます。つまり、血縁や生まれた環境の運を切り離れたところから、初めて「政治」が始まる、というものです。これを意識するためには、やはり「社会的なもの」の視点に立って、運を検討する必要があるんだと思います）。

こんな批判が予想されます。「倉橋クンの言うことが論理的に正しかったとしても、感情的にはわからんなあ。だって、自分の子は他所の子よりもかわいいもん」。これについては、私はそれも悪くない、と思います。私は、自分の子を捨てろとか、「あなたは子育てが下手だから、あなたの子供を手放しなさい」などというつもりは毛頭ありません。しかし、その感情（意識）をどう持つ（べき）か。繰り返しになりますが、やはりそれでも「世界公民」として見るべきだと思いますし、「世界公民」＝私的な子供ではないのだ、という意識の改革が必要だと思っています。

さて、だいた「結婚」からは、離れてしまったように思いますが、こういった展開自体が、前の手紙に書いたとおり、「結婚を問うことは、自動的にまったく別のことを問うようになってしまっている」という事態です。しかし、私はそれに陥らないために、「もし、現在（現代）において、人々（特に若者）にとって『結婚への障壁』となっているものが、すべて解消されたとしたら、それでも人々は結婚するのでしょうか？」という問いを設定したのでした。

岩本先生の現在の関心や、ご自身の経験から、子供の出産・養育という点が焦点化されましたけれども（確かに、それが一番大きな問題でもあります。なぜなら、子供という「他者」が絡みますので）、私は、「結婚への障壁」となっているものは、思考実験的にはすべて解消可能なものだと考えます。ともすれば、やはり人々はそれらが解消されれば、結婚しないのではないのでしょうか。というか、結婚する必要があるのではないか。もう少し精確に言えば、結婚と

いう制度に依拠せず、純粋な契約関係になっていくのではないのでしょうか。しかし、それでもなお結婚したい人はいると思いますが、その場合にも非常に自由な選択として結婚することを選ぶことができるのではないかと、思います。

長文失礼。まあ、ある意味、《いい若いもんがブラブラしていてもろくなことがない》典型的な意見ですけどね。

2009年10月16日 関西大学の研究室でビールを飲みながら

倉 橋 耕 平

倉橋 耕平 殿

あ～、まず “Thanks a bunch!” というのはスラングで、要は “Thank you!” という意味だから気にしないように。Get it?

では本題。私の率直な感想は、「あ～あ、だからリベラリストには困ったもんだよ」というものである。私には貴君の言い様は、「思弁的に可能なものはすべて実現されてしかるべきだ、いやむしろ思弁的に可能であるにもかかわらず実現されていないものは、現に慣習的に実践されていることよりも正しいのだ」と言っているように聞こえる。「一緒に歩きたい人」「情を交わしたい人」「共に生活したい人」がすべて別というのは、少なくともまっとう（decent）な人間の発想では有り得ないことなのである。確かに、已むに已まれず結果としてそのような事態に陥ってしまう、ということならあるかもしれない。しかしそれとて、その多くは、当人が端緒からそのような事態を望んでいたなどということではないはずなのだ。貴君のように、あえてそのような事態に自ら進んで臨むという実にそそっかしい人がいたとしても、それはその人にとって魂と肉体の冒険、救済などにはなりはしない。そのような行為は、人間が己の潜在的可能性を存分に発揮する対象としては間違っているからだ。「それで一向に構わない、自分の欲望のままに放縦な生活を送ることが望みだ」と言うなら、ただの莫迦か、自らが人間嫌い（misanthrope）にして唯我論者（solipsist）であることを、己の欲望を放縦に発散しているかのようにふるまうことで偽装している臆病者のいずれかではないのか（ちなみに私自身は、莫迦でありなおかつ人間嫌いにして唯我論者であるが、そのことを偽装しようとは思わない。可能な限り執着を捨てて、クラゲのように淡々と生きるのみ、である。違うか?）。

だから、「恋愛・性愛・結婚」の対象が一致していることを称して「ロマンティック・ラヴ・アイディアラジ」とするならば、それらの対象が、自らの意思を忠実に反映したものであるにもかかわらずほぼ常に一致しないという輩には、あんたたちは「ドンワン（Don Juan）・アイディアラジ」か、もっと俗に「ベッドバニー（bedbunny）・アイディアラジ」に囚われているからなのではないのか、と言わせてもらいたい（念のために言っておくと、こんな用語はな

い。いい加減に即興で作り上げたものだから、余所で使わないように)。

それと、私はここで「法律婚」のみを結婚だと考えているわけではない。だから、貴君の言う外国籍の日本居住者やトランスジェンダードが、特にこの国において結婚に障害があるとは到底思えないのだが。彼（女）らに、自身の性向に由来する結婚への障害があったとしても、それは程度の差こそあれ誰にでも当てはまることではないのか。確かに人間の「業」というのはおぞましいまでに深いもののようであるから、「程度の差」などという生易しい表現には収まりきらないような異端の者たちがいるらしいことも薄々ながらわかっているつもりだ。しかし、そのような人たちを盾に取って「したくても結婚できない人がある」ことの証左にされても困るのである。

それと、昔も今も日本の社会は、ごく少数の例外を除いて「結婚しなくても十分にやっていける社会」だったのではないのか。この辺りは寡聞にして知らんのだが、近代社会、都市というのは、それこそ「結婚しなくても十分にやっていける社会」のことだったのではないのか。

翻って、この社会から、貴君の言う「生まれてきた子供を、誰が育ててもよい」という視点を拭い去ったのも同じ近代社会というやつで、「世界公民」なる大仰な用語を用いずとも、この国の場合でいえば、たかだか数世代前の社会においては当たり前のように子どもを社会的な存在として扱っていたのではないのか。「子宝」という言葉は、親にとってというよりも社会にとって、という意味だったのではないのか（疑問文が続く悪文の典型だが、畏れ多くもイワモトさんが貴君に教えを乞うているのだからして、黙って看過するように）。

確かに、肝心のその社会というやつが、現代においては建前上だけではなく実際にグローバル・エリアにまで拡大している。そうなってくると、「生まれ、血縁 (nature)」と「育ち、環境 (nurture)」とに由来する、自分自身の力では如何ともし難い「運命」について、真つ当な感受性を具えた人間であれば、強く拘泥せざるを得ない。だから、元来とても気の小さい私は、常日頃から私自身の甚だしく高貴な生まれと、あまりに恵まれた環境とに、やましさに似た恐怖の念を抱いているくらいである。「何故に私はかくも恵まれてきたのか、そして相対的に判断するならば、やはり今も非常に恵まれていると言える環境に生きることができているのか?」、そういう思いが激しく私を畏怖させる。世界には、自らの責に帰せられることなど何一つない運命として、苛烈な環境下に暮らさざるを得ない人たちが数多くいるからだ。私が、「ユニセフ」や「あしなが育英会」などの募金呼びかけに、思わず分不相応のドネーションをしてしまうのもまた、そのような理由からであろう。

しかし、それならなおのこと、幸運にも自分以外の個体とカップリングできる環境にいる人は、その運命を存分に享受するべきなのではないだろうか。紙幅の関係で強引に結論を引っ張り込んでいる気がしないでもないが。もちろん、「ある行為が実現可能な環境にいる者は、例外なくそれを実践するべきである」などという乱暴なことを言うつもりはない。しかしどこかで、「できるのにしない」という選択は、運命を空費していることなのだという自覚は持って



おいた方がよいと思うのだが。いずれにせよ、外見の印象とは異なり、我々の間に一定の合意点は見出せたように思う。実は我々は、異なる場所から同じ物を眺めて、異なる表現で同じ事を語っていたに過ぎないのではないか。すなわちそれは、実に間の抜けた結論ではあるが、要するに「自らの自由意志に由来する選択が最大限実現可能であり、それでもなお人びとがハッピー&ディーセントに暮らせる社会であればいいよな」ということなのではないか。「結婚」に限らず、あらゆる選択がそれに当てはまるような。なんだ、あほらしい。本当にこれでいいのか？

最後にこの場を借りて、これまで貴君が山手短大キャリア・コミュニケーション学科のために尽力してくれた諸々のことに感謝を申し上げたい。厄介なことに引っ張り込んで悪かったが、得るものも大きかったはずだよな。そうだと言え！ まあ当分は“Adios amigo!”である。

2009年10月26日 神戸山手短大の研究室で鉄管ビールを飲みながら

岩 本 一 善

## おわりに

さてこの兩名、岩本の2ターン目の最後にもあるように、実は同じことを違う方向から語っていたに過ぎない。ただし、気鋭の思想家を自認する倉橋は、大衆を啓蒙する若きアヴァンギャルドとしてペダンティックな香りたっぷりにそれを語った。一方の岩本は、縁側でハモニカを吹き（吸い）鳴らしつつ mumble する talking blues man としてそれを語った。要するにそれは、「制度をいくら改革したところで、結局それを享受すべき人間の意識が変わらない限り、その改革が意図した通りの結果は得られない」ということである。これに対し倉橋は、制度はいくらでも改革可能である、だからこそ人びとの意識の部分を検討しなければならない、それが理論屋のスタンスであるとする。一方の岩本はといえば、なるようにしかならないから抛っておいてやるのが結局は本人のためだ、それが自立した個に対するリスペクトであるとする。

さいごに、このような戯書きの類いによって、由緒ある『神戸山手短期大学紀要』の紙面を汚すことは甚だ恐れ多いことであったが、本学キャリア・コミュニケーション学科のティーチング・スタッフにかくも不逞の奴輩が2名も在籍していたことの証となれればと思い、キィを打った次第である。ここで改めて冒頭にも記した言葉を繰り返しておくと、本稿が読者の思索を何らかの形で刺激するものになったのであれば、執筆（打鍵？）者として幸いである。